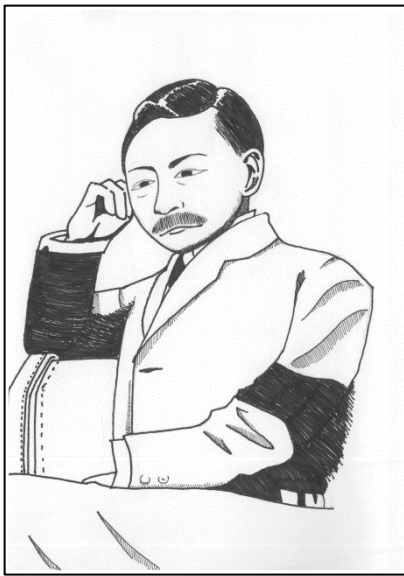




夏目漱石

(慶應3年(1867)1月～大正5年(1916)12月)

本名・金之助。江戸牛込(現在、新宿区)に生まれる。東京帝国大学卒業後、松山中学校、熊本第五高等学校などで英語を教える。明治33年(1900)から明治35年(1902)まで英国へ留学する。

帰国後、東京帝国大学などで教鞭を取る傍ら、明治38年(1905)、俳句雑誌『ホトギス』に『吾輩は猫である』を連載し、評判を得る。明治40年(1907)には教職を辞め、朝日新聞社に「小説記者」として入社する。

以後、朝日新聞に『虞美人草』、『三四郎』、『それから』、『門』、『彼岸過迄』、『行人』、『こゝろ』、『道草』、『明暗』などを連載する。大正5年(1916)12月9日、胃潰瘍のため死去。平成28年(2016)、29年には、それぞれ没後100年、生誕150年を迎えた。

吾輩は猫である

漱石は、俳句仲間であった高浜虚子から依頼され、明治38年(1905)1月、俳句雑誌『ホトギス』に「吾輩は猫である」を発表した。発表当初、漱石には連載する意図はなかったが、読者から好評を得たこともあり、翌年8月の第十回まで継続されることとなった。中学校教師の珍野苦沙弥に拾われた無名の猫「吾輩」が、苦沙弥やその家族、友人、近所の金満家・金田の言動などを皮肉まじりに報告する。「猫」の視点から語られた風刺は、回を追うごとに、明治の日本社会に対する辛辣な批判・批評として深められ、展開されていくこととなった。「吾輩は猫である」は、第一回および第七回を中心に、戦前から2000年代前半の中学校教科書まで断続的に掲載されている。

坊っちゃん

中編「坊っちゃん」は、雑誌『ホトギス』(明治39年1月)に一挙掲載された後、中・短編集『鶉籠』(明治40年4月)に収録された。「坊っちゃん」が掲載された『ホトギス』は「坊っちゃん」号とも呼ばれ、増刷されるほどの売れ行きを示した。繰り返し映像化もされており、「国民的小説」と言って良い作品である。「親譲りの無鉄砲」で「江戸っ子」の「おれ」は、学校を卒業後、「四国辺」の中学校に数学教師として赴任する。その地で「おれ」が巻き込まれる事件の顛末が回想される。単に痛快な悪漢小説ではなく、「おれ」を唯一可愛がってくれた「清」への哀切な想いも語られる。1950年代前半に教科書に採録されて以来、現在に至るまで、中学校の教材として定番化している。

草枕

中編「草枕」は、雑誌『新小説』(明治39年9月)に発表後、単行本『鶉籠』に収録された。画工の「余」は、東京の煩わしい人間関係を逃れ「非人情」を求めて、那古井という温泉郷を訪れる。漱石自身、発表直後の談話「余が『草枕』」の中で、「草枕」について、「この俳句的小説——名前は変であるが——が成立つとすれば、文学界に新しい境域を拓く訳である。(中略)先ず、小説界における新しい運動が、日本から起ったといえるのだ」と自負していた。写生文や美文調など、多様な文体から成る「草枕」は、一種の文章の手本(文範)として、戦前の読本から1960年代初頭まで繰り返し教科書に採録された。

こゝろ

『朝日新聞』に大正3年(1914)4月～8月まで連載された後、同年9月に岩波書店より単行本として刊行された。『こゝろ』は、漱石自身が装幀を手掛けたことでも知られ、また、岩波書店が刊行したのはじめての書物である。『朝日新聞』連載時は『心』という小説に含まれる短編の一つとして構想されたが、連載が長期化したため、単行本として刊行される際に、「上先生と私」「中 両親と私」「下 先生と遺書」の三部構成に改められた。「先生」の殉死、語り手の青年と「先生」や「奥さん」との関係などをめぐって、現在まで多様な解釈論争を生み出し続けている漱石後期の代表作であり、問題作でもある。『こゝろ』が高等学校の教科書に本格的に取り上げられるようになったのは、昭和38年(1963)以降である。特に「先生と遺書」が、青年期の友情と恋愛をめぐる葛藤や苦悩を描いた教材として定番化した。



宮沢賢治

(明治 29 年(1896)8月～昭和8年(1933)9月)

岩手県稗貫郡里川口町(現在の花巻市)に生まれる。盛岡高等農林学校卒業。

大正9年(1920)、日蓮宗系の在家仏教団体「国柱会」に入会。翌年、家族に無断で上京し、7カ月ほど東京で暮らす。このときに国柱会理事から「法華文学」の創作をすすめられる。以後、科学の知識と宗教的世界観にもとづく童話や詩の数々を制作。花巻で農学校教諭をしていた大正 13 年(1924)に、心象スケッチ集『春と修羅』と、童話集『注文の多い料理店』を刊行した。

大正15年(1926)に教職を辞した後は、農村で肥料相談等の活動を行い、また東北砕石工場技師の仕事もするが、昭和8年(1933)に病没。童話「銀河鉄道の夜」「風の又三郎」をはじめ、多くの作品は生前未発表で、没後に全集が刊行されてから評価が高まった。

どんぐりと山猫

大正13年(1924)12月刊行の賢治生前唯一の童話集『イーハトヴ童話 注文の多い料理店』に収録された短編童話。山猫から「おかしなはがき」が来て、一郎はどんぐりたちの争いをめぐる「裁判」に招かれる。どんぐりの争いを収めた「いちばんばかで、めちゃくちゃで、まるでなっていないようなのが、いちばんえらい」という言葉に、「雨ニモマケズ」につながるテクノボー礼賛の思想を読み取る解釈のほか、ナンセンス童話とみる解釈もあり、作品の読解には幅がある。国語科の教材としては、昭和21年(1946)に、戦後の新教科書完成までのつなぎとして文部省が作成した暫定教科書『初等科国語 四』に採録されたのをはじめとして、昭和20年代から30年代半ばまでの小学校教科書(四年生)に掲載された。その後は教科書から消えている。

やまなし

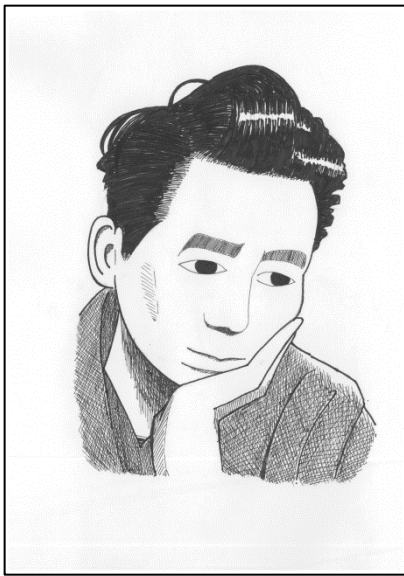
大正12年4月8日付の『岩手毎日新聞』に発表された作品。作者賢治は、メモの中で、「童話的構図」の一編とし、また「花鳥童話集」の一編としている。「小さな谷川の底を写した二枚の青い幻燈です。」という前置きと、「私の幻燈はこれでおしまいであります。」という結びの言葉を外枠としたうえで、「一、五月」「二、十二月」の二部から成る。視点の特異性や対比的な構成、表現の豊かさなどが注目され、「高度に結晶した一篇の散文詩」とも評されてきた。昭和37年(1962)に『中学国語 2年』(大阪書籍)に掲載されたのが教科書初登場。昭和46年(1971)以降は、光村図書出版の小学校六年生の教科書に掲載され続けている。「クラムボン」の正体にこだわって読解に躓く読み手も多く、「難教材」ともいわれている。

雨ニモマケズ

賢治の死から約5ヵ月後の昭和9年(1934)2月、草野心平編『宮沢賢治追悼』の出版記念会が東京・新宿で開かれた。その席で、賢治の弟が持参した「兄のトランク」から手帳が発見される。「雨ニモマケズ」は、そこに題名もなく記されていた。「雨ニモマケズ」という最初の詩句をそのまま使った題は、のちに作品として本に収められた際に付されたものである。「雨ニモマケズ」が作品として提供されるようになると、それまで独創的な表現者と目されてきた賢治は、農村での実践に生きた「賢者」として讃えられるようになっていく。それとともに、生前は少数の詩人にしか知られていなかった賢治の名は全国に広まっていった。義務教育で使用される教科書への採録は、昭和22年(1947)発行の国定教科書『中等国語一』にはじまる。本文の片仮名が平仮名に変えられた形での掲載だった。

永訣の朝

詩集『春と修羅』に収録された作品で、妹シの死の当日の日付が付されている。賢治の二歳下の妹シ(詩の中では「とし子」)は、結核により大正11年(1922)11月27日に亡くなった。賢治は「信仰を一つにするたったひとりのみちづれ」(詩「無声慟哭」)である妹の死に衝撃を受け、挽歌群と呼ばれる詩を作成する。「永訣の朝」が教科書に最初に掲載されたのは、昭和34年(1959)であるが、高等学校の詩教材としては今や定番となっている。終結部の詩句が「兜卒の天の食に変つて」と記されている教科書と、「天上のアイスクリームになつて」と記されている教科書があるが、これは、定本を『春と修羅』初版本とするか、賢治自筆の手入れが施された刊行後手入れ本(「宮沢家本」等)とするかによる違いである。



太宰治

(明治42(1909)年6月～昭和23(1948)年6月)

青森県北津軽郡金木村に生まれる。本名は津島修治。東大仏文科中退。生家は津軽の新興地主である。

自殺未遂、パピナル中毒など、退廃的な生活を送る中、昭和10(1935)年、「逆行」が、第1回芥川賞の次席となり、昭和11(1936)年には第一創作集『晩年』を刊行する。

昭和14(1939)年結婚し、精神的な安定期を迎え、「富嶽百景」「女生徒」等の佳作を残した。

戦後「ヴィヨンの妻」「斜陽」「人間失格」等を発表し、若者の大きな反響を呼んだが、昭和23(1948)年6月13日、玉川上水に入水。6月19日に遺体が発見された。

走れメロス

短編小説。昭和15年(1940)、「新潮」に発表。メロスは暴君ディオニス王の暗殺に失敗し、捕えられたが、妹の結婚式を執り行うため、親友セリヌティウスを身代わりにして三日間の猶予を得る。結婚式を挙げさせたメロスは、再び城に戻る道中で一度は力つきるものの、泉の力で立ち上がり、間際で帰還する。感動した王はメロスたちの仲間になることを申し出、少女が緋のマントをメロスに捧げて話は終わる。初めて教科書に掲載されたのは、昭和26年(1951)の『国語総合編 中学校二年上』(中教出版)。現在は中学校2年生の定番教材となっているが、その教材性において賛否が論じられている。

富嶽百景

短編小説。昭和14年(1939)、「文体」に発表。昭和13年の初秋、思いをあらたにする覚悟で甲州御坂峠の天下茶屋にやってきた私は、滞在中、富士との対話を重ねる。俗な富士を軽蔑していたが、周囲の人々の温かい情に触れ、「よくやってる」と思ったり、「単一表現」の美しさを見出したりするようになる。富士と対峙していた月見草に感動し、「富士には月見草がよく似合う」と思う。富士との対話を通じて「私」の心象を描きだした作品である。教科書には昭和38(1963)年の『高等学校現代国語1』(中央図書出版社)に初めて掲載され、これまで高校に掲載された太宰作品の中で最も多い。

津軽

長編小説。昭和19年(1944)、「新風土紀叢書」として刊行。私は故郷の事を執筆するため津軽を旅する。蟹田で旧友に会い、金木の生家で絶縁関係にあった肉親と再会。木造町、深浦、五所川原を回り、人々の歓待を受ける。最後は、幼い頃の子守だった、越野たけに会うために小泊へ行き、三十年ぶりの邂逅を果たす。たけのそばに座り、生まれてはじめて心の平和を体験する。故郷津軽で人々と交流し、自分の生まれの本質を再発見する物語である。教科書には昭和42年(1967)の『新版 現代国語 I』(大日本図書)に初めて採録。高校の教科書に掲載された太宰作品の中では「富嶽百景」に次いで多い。



中島敦

(明治42(1909)年5月～昭和17(1942)年12月)

東京市四谷区に生まれる。東大国文科卒。東大大学院中退。

漢学者の家系で育ち、中国古典への深い教養を身に着ける。昭和8(1933)年から横浜高等女学校で教鞭をとる。

喘息に苦しんでいた中島は、昭和16(1941)年学校を休職し、療養を兼ね南洋庁編集書記としてパラオに赴任する。その間、「山月記」と「文字禍」が「古譚」として昭和17(1942)年2月号の「文学界」に発表された。

帰国後、同誌5月号に掲載された「光と風と夢」が芥川賞候補となり、創作に専念することを決意するが、同年12月4日に喘息の発作により、死去。

山月記

短編小説。昭和17年(1942)、「文学界」誌上で「古譚」の総題で発表。唐代の伝記「人虎伝」を典拠としている。虎になった李徴が、旧友の袁傜と出会い、過去を語ることで自らの性情を見つめ直す話である。李徴は、虎になった理由を「臆病な自尊心」「尊大な羞恥心」や妻子を顧みない非道な人間性であったと自己分析する。初めて教科書に掲載されたのは、昭和26年(1951)に新制高等学校で使用された『新国語 六』(二葉)と『高等国語 二上』(三省堂)である。以後、継続して高校の教科書に採録され、現在でも、現代文の教科書 26 種中 25 種に掲載されている。

宮城教育大学附属図書館 特別展示企画

国語教科書のなかの作家たち——漱石・賢治・太宰・敦

会期：2017 年 7 月 11 日(火)～8 月 10 日(木)

会場：宮城教育大学附属図書館 展示ホール

執筆：

- ・夏目漱石 (木戸浦豊和 宮城教育大学附属図書館)
- ・宮沢賢治 (中地文 宮城教育大学国語教育講座教授・附属図書館長)
- ・太宰 治 (佐野幹 宮城教育大学国語教育講座講師)
- ・中島 敦 (同上)